

TV 報道検証【報道特集】 報告書

テレビ局：TBS	番組名：報道特集	放送日：2020年2月15日
出演者：金平茂紀、日下部正樹、膳場貴子、宇内梨沙 巡田忠彦（護衛艦空母化を取材）		
検証テーマ：オープニング、世界の軍事費、安倍総理のヤジ 【特集】護衛艦空母化の波紋		
報道トピック一覧 <ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス ・オープニング ・横浜のクルーズ船のアメリカ人が本国へ ・中国本土での帰省から戻る人に経過観察 14 日間 ・榎原容疑者「長いこと薬はやっていません」との供述 ・世界の軍事費 ・井上尚弥選手がスマホで確定申告 ・安倍総理のヤジ ・ダイヤモンドプリンセスの感染者 ・東京五輪聖火リレーのリハーサル ・茨城県でトラックと自転車の衝突事故 ・神奈川県で住宅火災 ・【特集】新型コロナウイルス ・【特集】護衛艦空母化の波紋 ・スポーツ報道 		
放送法第 4 条の見地からの検討・検証および該当トピックの報道内容要旨 <ul style="list-style-type: none"> ・オープニング：結論→特に問題なし 番組の冒頭で金平キャスターが「新型コロナウイルスへの不安が広がる影で政治にまつわる汚れが顕になっています、政府が一方的に東京高検検事長の定年延長を決めたり、国会で決して清潔ではない首相のヤジが飛び出したり、そんな汚れが目立つ政府にコロナウイルスへの対策を果たして期待できるのか、皆さんどうお考えでしょうか。」とコメントしていた。このシーンに当てられた時間は 22 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。 ・世界の軍事費：結論→特に問題なし 日下部キャスターの「世界の軍事費は前の年に比べ 4%増え、過去 10 年で最高の伸び率を記録した、とイギリスのシンクタンクが発表しました。」とのコメントを受けて、以下に朱記したナレーションが取り上げられた。 ナレ「イギリスの国際戦略研究所は 14 日、世界の軍事情勢を分析した報告書、ミリタリー・バランスの 2020 年版を発表しました。報告書によりますと 2019 年の世界の軍事費は 1 兆 7300 億ドル、およそ 190 兆円に達し、前の年と比べて 4%増えていて過去 10 年で最高の伸び率になっています。さらにアメリカと中国の伸び率は前年比でいずれも 6.6%増えていて、中国の軍事力近代化に対する懸念がアメリカを始めとする各国の兵器調達に関する決定に得鏡を及ぼしていると分析します。」 このトピックに当てられた時間は 55 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。 		

・安倍総理のヤジ：結論→特に問題なし

安倍総理のヤジについて、以下に朱記したような VTR が取り上げられていた。

森山裕（自民党国対委員長）「総理も言われっぱなしになりますと腹がたって言いたくなるのはよくわかります、わかりますが、やはり不規則発言はですね、与党も野党もしてはいけませんので」

ナレ「自民党の森山国対委員長は今日、鹿児島県で講演し、今週安倍総理が野党議員の質問後に意味のない質問だと野次を飛ばした問題について、審議中のやじは慎むよう強調しました、このやじを受けて国会は一時空転しましたが、野党側は安倍総理が明後日の衆議院予算委員会で謝罪することになったとして正常化しています。」

このトピックに当てられた時間は 40 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・【特集】護衛艦空母化の波紋：結論→問題あり

膳場キャスターの「では、次の特集です。二隻の護衛艦を改修し、空母化することを決定した日本政府。戦後初の空母保有は、専守防衛を逸脱し、憲法違反だという指摘もあります。空母の運用の要となる潜水艦取材を含めて安全保障の最前線をお伝えします。」とのコメントを受けて、以下に朱記した VTR が取り上げられていた。

ナレ「周辺を威圧するように立つ巨大な三本の塔。高さ 136 メートル。大正時代、旧日本海軍が建設した無線塔だ。太平洋戦争の開戦となった真珠湾攻撃の極秘電の全軍に向けて発信したといわれる。塔は、長崎県佐世保市にある。戦前は海軍。戦後は自衛隊と在日アメリカ海軍の拠点だ。繁華街のアーケードに小銃を持った部隊が現れた。尖閣有事に対応する水陸機動団。日本版海兵隊のパレードだ。映画料金も基地との共生を掲げるこの街ならではのものだ。港を見下ろす海軍墓地。今も海底に沈んだままの軍艦の慰霊碑が並ぶ。金剛、霧島など、現在のイージス艦の先代もここに眠っている。旧日本海軍の加賀と飛龍の合同慰霊祭。2 隻とも、アメリカとのミッドウェー海戦で沈没した空母だ。」

"兄が戦死した女性（89）「6月5日。この日だけは、年とってもやっぱ忘れられないですね。戦争だけは嫌ですよね。母のことなんかを思えば、本当悲しかったろうなと思うんですね。」"

ナレ「その空母加賀が、現代によみがえった。」

安倍首相「日米両国の首脳がそろって、自衛隊、米軍を激励するのは、史上初めてのことで、あり・・・」

ナレ「太平洋戦争で、史上初めて空母を主力に戦った両国。この日 2 人がアピールしたのは、同盟の強さだった。広島県呉基地。自衛隊最大の護衛艦かがの母港だ。任務を終えた潜水艦が、日の出とともに帰港してくる。全長、248m。19500トン。報道特集のカメラが捉えたかがの全景だ。この巨大護衛艦を戦闘機が発着できるように改修する。」

記者「どうみてもこれ空母に見えるんですけど・・・形が・・・」

ナレ「緘口令が敷かれているのか、現場の担当官は、空母の話に触れると急に、そっけなくなる。果たして空母を運用できるのだろうか。」

ナレ「自衛隊最大の護衛艦かが。ヘリコプター 14 機を搭載可能だ。設計当初から軽空母といわれ、戦闘機を艦載することが、想定されていた。艦載機は、レーダーに探知されにくいステルス戦闘機 F35B 垂直離着陸機だ。戦闘機は高熱を噴射するため、9200 平方メートルの甲板を耐熱仕様に改修する。」

永岩俊道元空将「エンジンはだいたい千℃に近い、噴射の熱ですから、それに耐えられですね、甲板にしないとイケない。」

ナレ「空母の保有を決定しても、すぐに運用できるわけではない。」

永岩氏「明日必要なら今準備しろといわれてもですね、この世界は非常にこの期間、あるいはお金等がかかるプ

ログラムですから、」

ナレ「パイロットの技量も不安材料の一つだ。」

元防衛省情報分析官 伊藤俊幸海将「陸上でその今まで乗ったことのない飛行機を上下発着することの訓練から始まり、日本で洋上で降りるなんて言うのは、航空自衛官やったことないんですよ。怖くてしょうがないらしいんですよ。」

ナレ「護衛艦かがの大きさは、旧日本海軍の戦艦大和に匹敵する。また扉を開ける。なかなか船首にたどり着けない。医務室はベッド数35。手術室に加え、感染症対策の隔離室も備えている。ブリッジ（艦橋）には、巨大な艦船を隅々まで監視する30台のモニターが並ぶ。ここが空母の心臓部航空管制室だ。」

記者「これだけでよく見えますね。」

ナレ「この線から戦闘機の離着艦をコントロールすることになる。空母保有の背景には、中国の急速な海洋進出がある。第一列島線と、第二列島線が中国が設定している防衛ラインだ。将来この海域からのアメリカの軍事力排除を目指している。2003年、鹿児島県の大隅海峡を進む潜水艦。掲げられた国旗に安全保障関係者は驚愕した。中国海軍が初めて第一列島線に現れた瞬間だった。これ以降、大艦隊が太平洋で演習を行い、外洋海軍に成長した姿を誇示するようになったのだ。」

P3C 乗組員「目標は、170度。20ノットで南南東へ向け、航行中。」

ナレ「中国艦隊を目標と呼ぶ追跡劇も起こるようになった。」

"伊藤氏「10年後には、もう中国は4隻持ってますよ。空母を」

伊藤氏「第一列島線と第二列島線の間にもう空母がいる状態になるんですよ。中国のね。ていうことはそこから飛行機が飛び立つんですよ。日本の真南で。」"

ナレ「中国海軍を抑止するために空母が注目されてきたのだ。空母保有に関する論争は、以前から起きていた。」

社会党 久保 亘議員（1988年）「日本の自衛隊に空母を導入することは、絶対にないといい切れますか？」

瓦 力防衛庁長官「我が国の専守防衛を踏まえまして、攻撃型空母は持ちえないでございますが、防衛のための空母は持ちえる。左様のように答えさせていただきます。」

"久保議員「委員長。」

委員長「久保君」

久保議員「防衛庁長官ね、攻撃型空母と、防御型空母との区別を説明してください。」"

ナレ「攻撃型空母と防御型をどう区別するのか。議論は平行線のままだった。しかし」

安倍首相「憲法上申しました通り、保有の許されない攻撃型空母でないことは明らかであると考えております。」

ナレ「安倍政権は、本格的な議論を尽くさないまま、護衛艦の空母化を決めてしまった。憲法学者は専守防衛が、形骸化したと指摘する。」

学習院大学法科大学院 青井美帆教授「政権の憲法の扱いがあまりにも、軽いからということもおそらくあって、戦後日本国憲法が発効した時に、防衛のためのみならば、防衛力を持つことができるけれども、他国に出かけていくところはないというのが常識だった。かつて理解されていた専守防衛では少なくとも、ないはず。」

ナレ「空母化は、どのような経緯で決まったのか。海上自衛隊のトップとして防衛政策に関わってきた古庄元海上幕僚長は、今回の決定に驚きを隠さない。」

古庄幸一元海上幕僚長「何を持って攻撃型といっているのか、何を持って防御型といっているのか。ってそれもそんな区別なんてありませんから、軍事的な本質を、議論してないから。」

記者「防衛省の中でも、相当・・・」

古庄氏「みんな反対だと思いますよ。」

ナレ「政府が空母化に固執する理由は、中国の海洋進出だけではない。」

トランプ大統領（字幕）「日本は最近新しい F35 ステルス戦闘機 105 機を買ってくれると発表した。」

ナレ「アメリカから購入する戦闘機を運用するためだと見方が強い。」

基地監視団体・リムピース 篠崎正人氏「調達兵器に基づいた運用計画。あるいは防衛計画と、本末転倒のやり方ではないかなと。さまざまな兵器を買わされてるわけですから、いわゆる爆買的になってるわけですから。ますます運用計画が何なのかというのが見えなくなってしまうている。」

ナレ「空母化を主導したのは、官邸の MSC。国家安全保障会議だといわれている。」

伊藤氏「上から降ってきたから。NSC からどーんと降ってきた感じで、やれてきたから。海上自衛官としてはうーんと」

"自衛艦隊 香田洋二元司令官「我が国の防衛のためには役立つ手法じゃない。けど、空母を正当化するために B (F35 垂直離着陸機) にしているわけですよ。それは官邸が考えた話で、自衛官考えた話じゃないよ。海空自衛隊があたふたしているのは、自分たちが考えてもないことをやらされてるということですよ。"

ナレ「空母保有に舵を切った日本。実際に運用できるのだろうか。本格的な運用には、空母 4 隻と、それぞれに護衛の艦隊が必要となる。現在の自衛隊の能力では不可能だ。」

"古庄氏「最強の部隊は、最低でも 4 個チームないと、1 個チーム修理です。修理が終わって出てきて、まあ初歩的な訓練をやり済みしました。訓練が整いました。一番今最強のチームはここにいますっていう、最低 4 つ。たぶん、ものすごい予算じゃないですかね。"

ナレ「空母は艦載機を合わせると、1 隻 2 兆円。アメリカが 11 隻の空母を保有。72 時間以内にどこの地域の紛争にも介入できるように常に 5 隻を展開させている。1 隻を失うだけで、世界戦略が狂ってしまうとも言われる。このため、潜水艦やイージス艦などの護衛艦隊が半径 300 キロの制海権の完全に掌握しながら移動する。艦隊の要が潜水艦だ。各国が増強に力を入れる潜水艦の内部を取材した。」

戸井雄一郎前潜水艦隊司令「船全体が国家機密というか、防衛機密になっております。」

ナレ「これは、防水を専門に担当する応急班が、出港を前にならざる訓練だ。潜水艦せとしお。水面に出ている部分は、3分の1に過ぎない。表面は、その隠すため、音を吸収する特殊なゴムで覆われている。」

記者「おはようございます。」

ナレ「直径およそ 1 メートルのハッチ。ここに入ると乗組員は、数か月外との接触がない生活が始まる。出港前には入念な点検が行われる。肝心なところは手動だ。」

ナレ「浮上したまま、相模湾の訓練海域に向かう。」

ナレ「東京湾は、海の銀座と呼ばれるほど、船舶の往来が激しい。過去には漁船と衝突事故も起きた魔の海域だ。潜望鏡はレーダーで発見されないように、ステルス仕様になっている。電波を収集する精巧なアンテナなどは、マストに格納されたままで、本数や長さは極秘だ。」

ナレ「他国の領海ぎりぎりまで近づき、水深 20 メートルからアンテナを上げて電波を収集する。北朝鮮や中国の情報も少なくない。」

乗組員「艦橋へまもなく潜航する。」

ナレ「潜航した後は、昼夜の区別がつかなくなる。このため夜間は赤色灯がつけられる。毎回必ず実施されるのが、魚雷発射訓練だ。」

乗組員「当海域を航行する敵艦艇と思われる目標に対して魚雷攻撃を行う。用意。セット。シュート。ファイアー。発射ランプ点灯。まもなく命中。目標命中間違いなし。」

ナレ「ここが、魚雷の発射管室だ。潜水艦の前方にある。」

"記者「これが魚雷ですか。」

乗組員「そうですね。これが魚雷です。」

記者「どれくらい行くんですか？」

せとしお 入田 壮副長「距離？それはちょっとお答えができない。」

記者「だいが行きますか？」

副長「それなりの距離は」 "

"記者「これは、2個積んでんですか？通常は？」

入田氏「それもちょうとお答えができないですね。やはり能力に関するものですので。」 "

ナレ「夏は、冷たい魚雷の横が休憩場所として大人気だという。魚雷の他、対艦ミサイルハーブーンも搭載していた。改造すれば、ピンポイント攻撃も可能な巡行ミサイル、トマホークの発射も不可能ではないといわれる。」

ナレ「潜水艦が重視されるのはなぜか。」

入田氏「だれにも知られずに、行動できるということと、いるかもしれないというプレッシャーを与えることができる。いなくてもいいんですけども、いなくてもいるかもしれないと思わせることで、相手に脅威を与えることができる。」

ナレ「ソナー。音波探知機が潜水艦の目と耳だ。能力は極秘。その一室にカメラは近づけない。」

ソナー担当者「例えば、クジラが遠くの仲間と連絡するときに泣く音とか、エビとかの甲殻類がはさみを動かしたときに鳴る音。パチッパチッとかそういう音。」

ナレ「沿岸の音は情報の宝庫だという。沿岸で何の工事を行っているかも分析する。海水の条件によるが、かなり離れた場所の音も収集可能だ。」

戸井前司令「レーダーとか、海水温度さまざまなのが影響して、それによって、1キロ先まで届きますとか、聞こえますとか、それが10キロ先、あるいは100キロ先という形で、それぞれによって聞こえる距離とか違ってきます。」

"記者「1000キロ先も聞こえますか？」

戸井氏「その辺はですね、いろいろなのが、状況によっては聞こえてくることがあると思います。」 "

ナレ「乗組員70人の食事は、海上自衛隊の調理学校出身者たちが作る。相手に見つからないように、音と熱には神経を使う。包丁も音をたてないように使う。節水も徹底している。」

乗組員「やっぱりみんな水が大切という思いは、持ってますので、そんなに毎日入る人はいないです。」

ナレ「行動範囲が分かってしまうため、それだけ食料を積んでいるかは、秘密だ。中は撮影できない。」

ナレ「ここで6人が寝起きする。」

乗組員(22歳 乗艦歴2年)「洗濯はしないですね。何日間出港できるとか、いくらまで潜れるというのは、全部機密だよと言うのは、最初の頃から口を酸っぱくして言われます。もう起きた瞬間にバンッとぶつかってしまうっていう。まあ用途別に一応下着と服と。」

乗組員(32歳 乗艦歴14年)「不自由なこと。まあ洗濯ができないとか、風呂が毎日入れないとか後、家族に連絡が取れないとか。」

ナレ「艦長だけは個室を持てる。が、この狭さだ。」

ナレ「いたるところが、収納スペースになる。秘密の塊潜水艦。情報はごく限られたルートにしか上がらない。」

"記者「だいたいどのわかるでしょう？」

戸井前司令「その辺はですね、お答えを差し控えさせていきたいと思います。ごく限られた人しか、知りえない情報ですので、その辺のほ秘、保全というのは、非常に厳格に管理されていると。」 "

ナレ「21 隻目の最新鋭潜水艦 とうりゅうが進水した。建造費およそ 700 億円 22 隻目も近く完成する。日本は世界屈指の潜水艦大国だ。」

ナレ「1 影後、日本の潜水艦に対抗するかのようになり、中国は初の国産空母 を就役させた。際限のない軍拡競争が続いている。」

ナレ「ハワイ諸島沖、水深 5400 m。去年秋、旧日本海軍の艦船が 77 年ぶりに発見された。6 月の慰霊祭から 4 カ月。あの空母加賀だ。」

空母加賀会 会長「いやー5400m の海底に、まだあるっていうのがですね、それが見つかったっていうのが、なんかまだ不思議な感じでしたね。こういう犠牲の方たちのおかげで、今の日本の繁栄、安全は、なってると思いますんで。」

ナレ「戦後はじめて、空母保有に舵を取った日本。今も海底に眠ったままの乗組員たちは、どのような思いで見ているのだろうか。」

VTR を受けてスタジオでは以下に朱記したようなやり取りが繰り返された。

膳場「取材した巡田記者です。空母運用には想像以上の膨大な訓練。それから、軍事技術が必要なのがかいま見えませんでした。その分機密性も高いということなんでしょうね。潜水艦のハッチにまで、モザイクかけていましたよね。」

巡田記者「いやー我々が一番こう、極秘ですよ。あの入り口はですね、カメラがずっと廻ってたんですけども、鉄板のこの厚さでですね、潜れる深度が分かるんですね。で、あの VTR の中で、隊員も言っていましたけれども、あのーやっぱり深度というのが、潜水艦の生命線で、極秘ですね。で無防備な相手からいわば垂れ流しの情報を取るのが潜水艦で、やっぱりかなりの情報をとれますよね。」

日下部「F351 機がですね、100 億円。これが本当に国民のためならまだしも、どこかこうアメリカのためみたいなものが見え隠れしてですね、それなら、もっと国民のためになることに使った方が良くないかな、なんでも思ってしまう。」

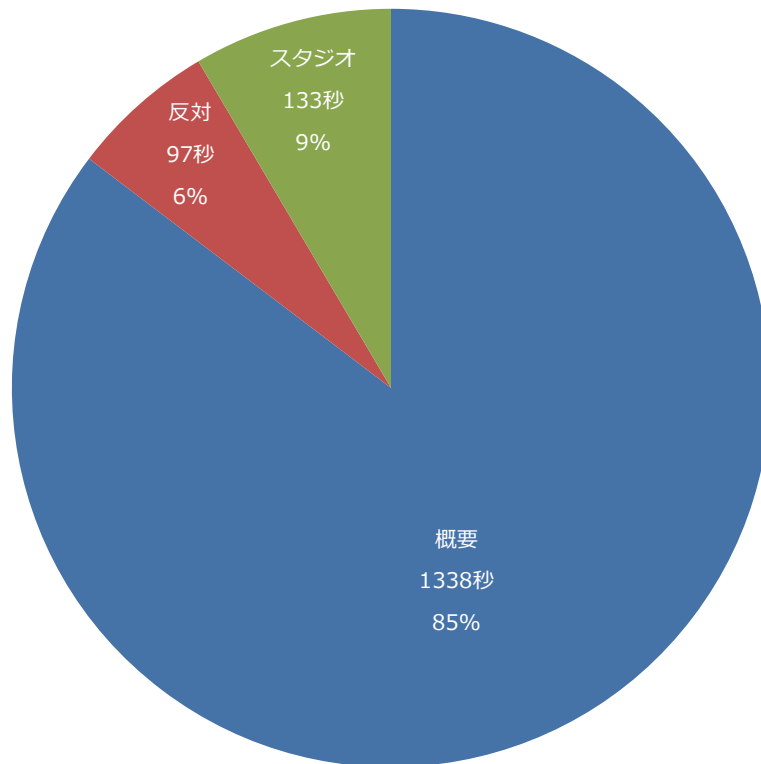
巡田「最終的にはですね、F35A を 105 機、垂直離着陸の F35B を 42 機。合計 147 機を買います。で 1 機あたり 100 億円以上ですから、合計 1 兆円を軽く越します。トランプ大統領のバイ・アメリカン。アメリカの兵器の激しい爆買いですよ。空母には空母で対抗するのが、やっぱり危うさを感じますね。」

金平「それにしてもね、あのー防衛省の OB の人がですね、軒並み空母化に反対してるの驚いたんですけども、その専守防衛ってのが歯止めという観点からみてね、巡田さんは今後どういうことになってくると思いますか。」

巡田「官邸主導にはですね、やっぱり反対ですよ。でやっぱり駐留経費などですね、アメリカは今以上に負担を求めてくると思います。今後ですね。で、空母の活動範囲などはまだ不透明のままですし、中東まで伸びるですね、この前、あの護衛艦がでましたけれども、日本のシーレーン防衛をですね、空母護衛で、導入された経緯がやっぱりイージス艦の場合ありますから、アメリカに引き回されるのではなくてですね、日本はもっと主体性のあるその同盟関係てのを目指すべきだと思います。」

膳場「巡田記者でした。以上特集でした。」

この特集に当てられた時間は 1568 秒で、時間配分及び比率は以下の通りであった。



この特集では VTR、スタジオのやり取りを通じて空母化に対して明確な賛成意見というのは取り上げられておらず、そうした点からは放送法第四条一項二号の「政治的に公平であること」および同四号の「意見が対立している問題については、できるだけ多くの角度から論点を明らかにすること」という点から問題であるように見受けられた。

最高裁判例の見地からの「印象操作」に関する所見および該当トピックの報道内容要旨

特になし

検証者所感

特になし